

現代日本社会の中において教会は・・・



今年のお正月、福岡市の某修道会のシスターたちからお招きを受けて、楽しいひと時を

過ごしてきました。たまたま、宮崎の修道院から来られていた管区長様にも初めて会うことができました。4日(木)の朝食後、管区長様はローマでの会議出席のため、福岡空港へと出発。食堂に残ったシスターたちと長話の分かち合いになりました。

あるシスターが「私の姉の在籍している教会では、若い人がいない。長年、受洗者も出ていない」と、ある地方の難しい状況を吐露。今日では、日本のどこの教会でも、程度の差こそあれ、似たような状況でしょう。なぜ、こうなったの？昔の教会は人も多くて、子どもや若い人もいて活気があったのに・・・。

理由はいくつか挙げられるとは思いますが、私は一つには、こう思うんです。「信仰なんか無くなったって、教会と関わらなくなったら生活してゆける」「信仰・教会よりも、自分にとって大切なことがいろいろある」からだ。

戦後まもない頃の混乱期、貧しい人々のために教会が手を差し伸べていた。“お国のために”という戦前・戦中の思想統制に縛られていた人々にとって、キリスト教の隣人愛や平和の理念は、感動的なものとして映ったのかもしれない。また、教育事業の担い手が少ない時代、教会の学校事業は

社会的なニーズに応えるものとして一目置かれていたのではないのでしょうか？教会に人々が集まってきたのも理解できます。

それが、今日ではすっかり状況が変わってしまいました。基本的人権の尊重は、充分実現されているとは言えないものの、人々は自由を謳歌し、博愛・平和思想はいろんな個人・団体によって主張されている。社会事業の担い手はたくさんいる。土・日といえども仕事は忙しく、学校行事・塾・部活・サークル活動・レジャーなどやるべきことがある。

それに対して、「教会は行っても行かなくてもいいもの」「信仰はあってもなくてもいいもの」になってしまった。ある意味で、人々にとって教会の魅力が薄れたとしても致し方のないことなのかもしれない。さあ、私たち教会共同体はどうしたらいいんでしょう？



私見ですが、今は、“種まき”と“準備”の時じゃないか？これからの日本は、ますます状況が厳しくなってゆくでしょう。状況が悪化して、戦中・戦後の混乱期のような時代が再び来るかもしれない。その時、信仰の証しが光り輝く時かもしれない。

イエス様は私たちに求めています、「目を覚ましていなさい」と。いざという時、キリスト者としての証しができるように、キリストを宣べ伝えてゆくこととあわせて、小さな福音的証しを、これからも日々積み重ねてゆきましょう。